

日置市吹上歴史民俗資料館の活性化を目指した実践事例

大西 智和*

1. はじめに

筆者は昨年度に続き、日置市との包括連携協定に基づく連携事業（日置市吹上歴史民俗資料館の活性化）への取り組みの一環として、吹上歴史民俗資料館の活性化をとおして、地域振興・観光振興への寄与を目指した研究を進めている。

2018年度は吹上歴史民俗資料館の現状の観察や資料調査、博物館活動に市民の参画を取り入れている博物館の事例調査、地域の活性化に文化・自然遺産や文化財を活用している事例調査（大西2019a）などを行った。また、吹上歴史民俗資料館の活性化に役立てる目的で、アンケート調査を実施した。2019年度には、昨年実施したアンケート調査の分析（大西2019b）、吹上歴史民俗資料館が所蔵する資料と関連する史跡・遺跡の情報収集を行った。さらに、アンケート調査から得られた指針やこれまでの資料調査を取り入れて、吹上歴史民俗資料館の活性化を目指した特別企画展示を、鹿児島国際大学ミュージアムで開催することとした。

本稿では、この特別企画展示のコンセプトや展示の内容、資料館活性化を意図した工夫などについて述べたい。

2. 日置市歴史民俗資料館について

日置市吹上歴史民俗資料館（図1）は日置市吹上町中原2568番地に所在する。日置市役所支所の近隣、吹上中央公民館の隣という好条件の立地である。旧吹上町の施設として昭和57（1982）年に開館し、平成17（2005）年の合併による日置市の誕生以後は日置市吹上歴史民俗資料館として現在に至っている。

吹上町の歴史と民俗について実物資料を中心に展示されていて、歴史部門では、旧石器時代から近・現代までの、吹上町の歴史を概観することができる。とくに、戦国島津氏の基礎をつくった伊作島津氏10代領主忠良（日新公）をはじめ、伊作島津氏に関する展示は充実している（図2）。民俗部門は吹上町内で使われていた民具や、町内の祭りに関する資料が展示されている（図3）。開館日時は平日の9時から16時30分、資料館の担当者は常駐していないため、観覧希望の場合はあらかじめ連絡する必要がある。入館料は有料で、大人110円、小・中・高生50円である。

キーワード：日置市歴史民俗資料館、博物館、文化財、活性化

* 本学国際文化学部教授

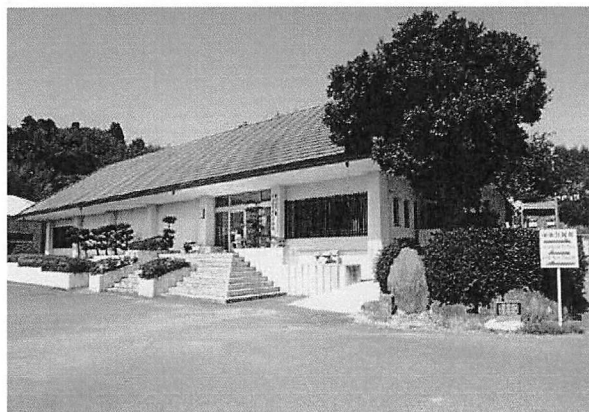


図1 日置市歴史民俗資料館



図2 歴史部門展示



図3 民俗部門展示

3. 日置市吹上歴史民俗資料館に関するアンケート調査の結果について

アンケート調査は2018年11月25日に日置市伊集院文化会館で実施した。この日に文化会館で行われた明治維新150周年記念事業「おじゃったもんせ！ひおき明治維新博」記念講演会、「小松帯刀と明治維新一大政奉還を中心に―」（講師桐野作人氏）、および企画展への来場者にアンケート用紙を配布し、91枚の回答を回収することができた。

アンケートの項目は、居住地、性別、おおよその年齢、日置市吹上歴史民俗資料館来館の有無、来館時の印象、再訪の意思の有無、来館経験の無い場合の理由、どんな展示があれば見てみたいのか、資料館の中にあれば良いと思う設備、資料館に対する意見や要望についてである。

回収した回答には本資料館の活性化につなげることができると思われることが多く含まれていた。

来館未経験の理由として、資料館の存在が認知されていないことが大きかった。このことから、吹上地域以外の日置市居住者や日置市外の居住者に対して、資料館の周知を図ることがまずは必要であると考えられた。

来館経験は「男性」で「40歳以上の年齢層」が高い傾向にあった。このことから、資料館の活性化のためには、女性や若年層へのアピールの必要性がうかがえた。しかし、発想を変えて、来館してもらえる傾向が高い、「男性」・「40歳以上の年齢層」をターゲットとする特別企画展示は、来館者増につながることも考えられる。この層は、歴史にも関心が高いと考えられるため、吹上地域に所在する寺院跡や城跡・遺跡と、それらと関連する資料を用いることは有効であると思われた。



図4 制作したパネルの例（大汝牟遲神社）

来館時の印象で挙げられた、「本物で貴重な資料が多い」といった好意的な意見、資料館についての意見や要望で寄せられた「企画展や展示品の更新を行ってほしい」、「伊作島津氏発祥の地ということを知ってもらえるようにしてほしい」、資料館内にあると良い施設でもっとも多くの要望が寄せられた「観光案内所」などの意見や要望にも応えられる特別展示が、資料館の活性化に有効であると考えられた。

4. 企画した特別展示

4.1 特別企画展のコンセプト

アンケート調査の結果やこれまでに実施した実地調査、資料収集、フィールドワークの結果を基に、特別企画展のタイトルは「つながる一日置市吹上歴史民俗資料館と史跡・遺跡―」とし、開催は鹿児島国際大学ミュージアムで行うこととなった。

日置市吹上地域に所在する著名な史跡や遺跡と、資料館に収蔵されているそれらの史跡・遺跡と関係する資料とを結び付ける形で展示し、資料館が収蔵する資料の魅力や価値を知ってもらうとともに、資料が所蔵されていたりゆかりがあったりする史跡、それらが出土した遺跡もあわせて知ってもらい、さらには、そのような史跡・遺跡を実際に訪ねてその魅力にも触れてもらいたい、ということを図って企画した。実際に今回取り上げた史跡や遺跡の多くは、鹿児島県や日置市の文化財に指定されており、見学しやすいよう整備されている場合も多く、積極的に活用を図るべき資産である。

取り上げた史跡・遺跡の説明のためのパネルを制作したが、説明はできるだけ短く簡潔になるようにした。また、パネル中にも画像を複数用いて、よりわかりやすいものになるよう努めた(図4)。なお、説明の解説文は現地に立てられている案内板、日置市や旧吹上町が発行した案内のパンフレット、遺跡の報告書、2017年度に鹿児島国際大学ミュージアムで開催された特別企画展「吹上の考古学史をたどる」の際に制作されたパネル、鐘ヶ江(2018)や常田(2018)などを参照して作成した。

今回の企画展示に合わせて、企画展の内容をイメージとして伝えることを意図した3分程度の動画を制作した。展示で紹介する史跡・遺跡とそれに関連する資料を、短い説明で紹介する内容のものである。この動画は、展示への導入部と位置づけ、開館時間中常時再生する。また、特別企画展の開催場所や期間などの情報を補足してYouTubeなどの動画共有サービスによって公開し、特別企画展示の宣伝にも役立つつもりである。

展示と関連して、日置市全域の文化財の紹介や吹上地域の様々なことを紹介する動画「吹上チャンネル」も取り上げた。

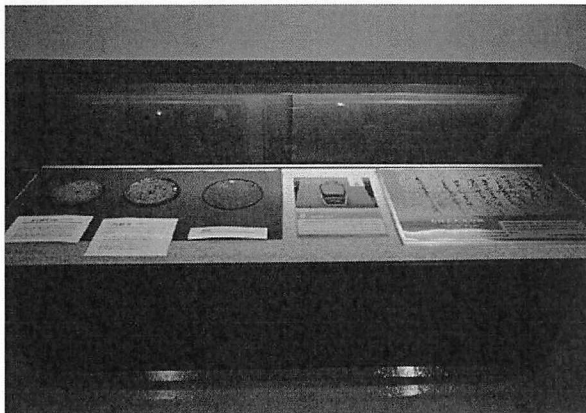


図5 大汝牟遲神社関係展示資料

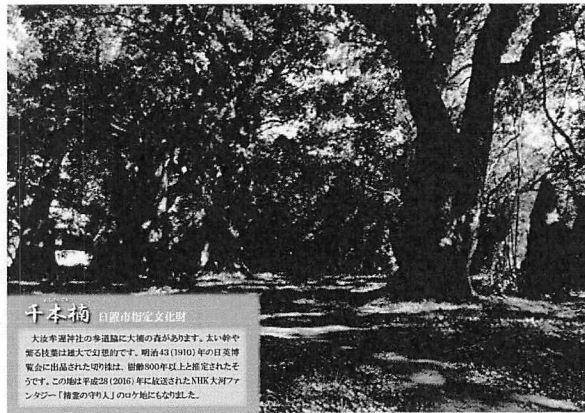


図6 千本楠のパネル

4.2 取り上げた史跡・遺跡と展示資料

大汝牟遲神社

大汝牟遲神社は日置市吹上町中原にあり、大汝牟遲命（大己貴神・大国主命）、玉依姫命、応神天皇、神功皇后、仲哀天皇、仁徳天皇を祭神としている。伊作島津家の宗社として、歴代当主の尊崇も厚く、忠良（日新公）、貴久、義久、義弘、家久、光久等の造営の記録が神社に残っている。

社殿には樹齢千年以上とされ、幹回りは14mもある御神木や、「イシノコンボサア」という子授け・安産の願掛け石などもある。

主な行事と神事は、祈年祭（田島殿神事・3月第2日曜日より）、秋祭り（流鏝馬・11月23日）などがあり、流鏝馬は鹿児島県の無形民俗文化財に指定されている。

吹上歴史民俗資料館には、大汝牟遲神社から寄託された、島津忠良が奉納したとされる籠、日置市で最も古い文書である島津義久黒印状、12面の銅鏡、島津斉宣の筆による短冊など多くの資料が展示・収蔵されている。

本企画展では、銅鏡3面と、籠および島津義久黒印状のパネルを展示した（図5）。

千本楠

大汝牟遲神社の参道脇、神社から150mほどの所に大楠の森があり、太い幹や繁る枝葉は雄大で幻想的である。明治43（1910）年の日英博覧会に出品された切り株は、樹齢800年以上と推定されている。この地は平成28（2016）年に放送されたNHK大河ファンタジー「精霊の守り人」のロケ地にもなっている。日置市の天然記念物に指定されており、本企画展示ではぜひ訪れてもらいたい場所として、パネルで紹介した（図6）。

常楽院・妙音十二楽（図7）

建久7（1196）年、京都の天台宗常楽院の住職であった宝山検校は、島津氏初代忠久に従い薩摩にくんだり、田尻中島に常楽院を建立したと伝えられている。歴代の住職は各地で島津氏の威徳高揚につとめ、琵琶を吟弾して仏法を広めた。その際に弾奏された琵琶が薩摩琵琶に発展していったと言われている。

妙音十二楽は鹿児島県指定の無形文化財に指定されており、毎年10月12日に常楽院で行われている（図8）。南九州各地の僧が集まり、琵琶・太鼓・笛・ホラ貝等8種の楽器によって合奏する。寺院で演奏されていた音楽の流れをくむ特色ある芸能である。

吹上歴史民俗資料館には、妙音天、宝山検校のものとしてされる琵琶、金属製の法具などが収蔵されている。



図7 常楽院

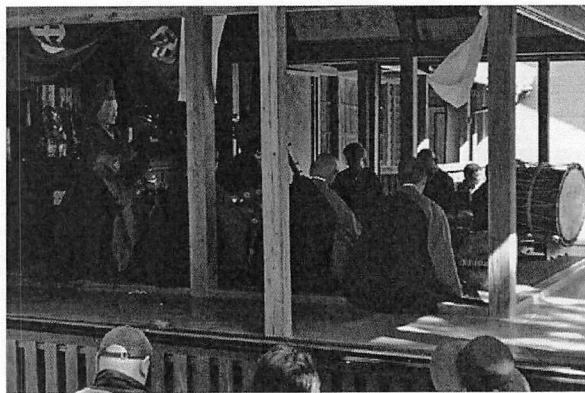


図8 妙音十二楽（鐘ヶ江賢二氏撮影）

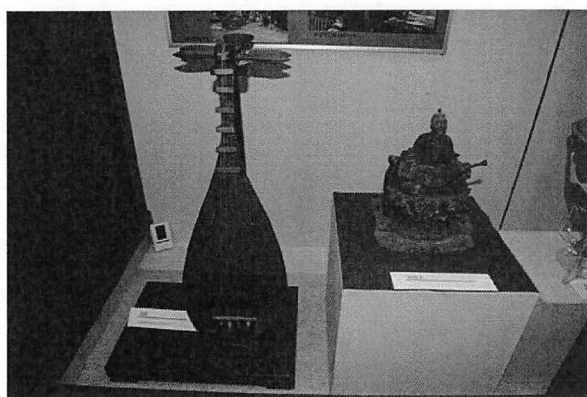


図9 常楽院関係展示資料



図10 天昌寺伊作島津家墓所

本企画展では、妙音天と宝山検校のものとしてされる琵琶（日置市指定文化財）を展示した（図9）。

天昌寺跡

永吉島津氏の菩提寺で日置市指定の史跡である。元中2（1385）年、石屋真梁が建立されたとされる。もとは妙通寺と呼ばれ、島津義弘の甥である島津豊久が関ヶ原で戦死した後、遺臣たちが日向佐土原から永吉に移住し、ここに墓を建て天昌寺とした。天昌寺は二代豊久の法名「天岑昌運大居士」にちなんでおり、豊久以来歴代の永吉領主とその家族の墓がある（図10）。

吹上歴史民俗資料館には、天昌寺の肉筆画が所蔵されていて、そのサイズは幅約76.5cm、長さ約142cmである。江戸時代後期に編纂された『三国名勝図会』（五代他編1966）の天昌寺の図に構図や人物の数や配置が類似している。

本企画展では、肉筆画の写真パネルを展示した（図11）。

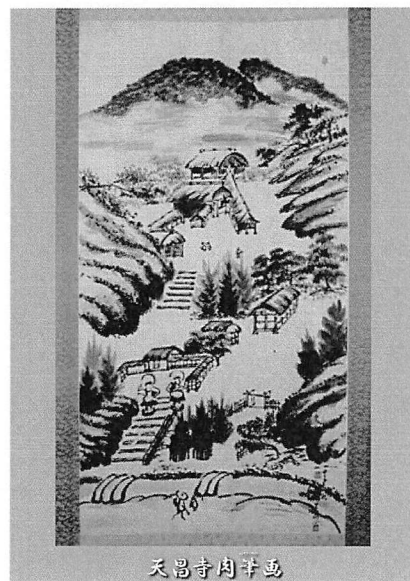


図11 天昌寺肉筆画の写真パネル

伊作城跡

日置市吹上町中原の、標高約70mの台地に築かれている。面積50haと南九州屈指の巨大な中世山城である。南北朝時代（1337～1392）に、島津本家4代忠宗の弟、久長が伊作荘地頭職を得て伊作島津家の始祖となり、この城を築いた。その後10代忠良（日新公）に至る、およそ250年間の伊作島津氏の居城となっ



図12 亀丸城と蔵之城を隔てる空堀

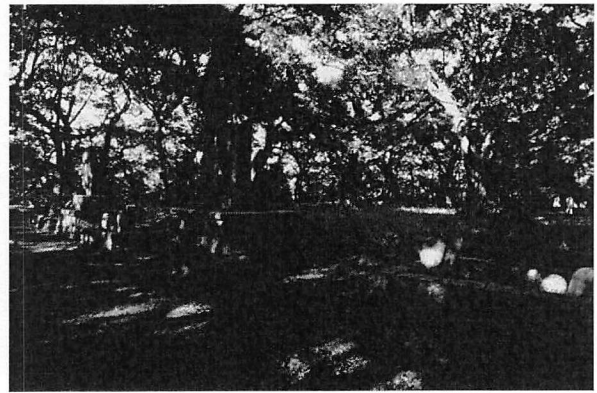


図13 亀丸城



図14 伊作城関係展示資料

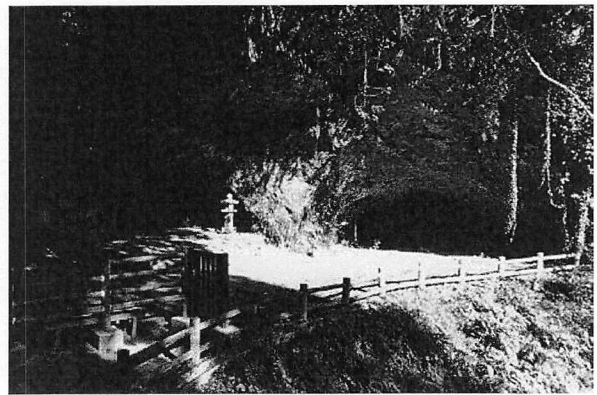


図15 黒川洞穴

た。戦国島津氏の基礎を築いた忠良、その孫で、三州統一を成し遂げ、九州をも制覇しようとした義久・義弘ら4兄弟もこの地で誕生した。江戸時代は藩の直轄地とされ、重要な城として麓に郷士が配されて、城の地形もそのまま残されていた。20数カ所の曲輪が存在し、それらを分ける空堀は主なものだけでも27本を数える(図12)。最も長い空堀は380mもあり、高さ10m以上の断崖を持つ空堀もある。

本丸である亀丸城(鹿児島県の史跡に指定)には、忠良や4兄弟たちの誕生を示す記念碑や誕生石が置かれている(図13)。

吹上歴史民俗資料館には、伊作城でこれまでに行われた発掘調査によって出土した青磁や土師器、陶器、青磁や染付、銅銭などが収蔵・展示されている。

本企画展では、土師器、磁器、染付、銅銭および参照資料として赤井田遺跡出土の青磁碗を展示した(図14)。

黒川洞穴

吹上町永吉に位置し、川の浸食によってできた谷の斜面にある洞穴で、縄文時代晩期の「黒川式」土器の標式遺跡でもあり、鹿児島県の史跡に指定されている(図15)。坊野小学校教諭の辻正徳氏によって洞穴内から遺物が発見され、遺跡の存在が周知された。1952(昭和27)年以降、繰り返し発掘調査が行われている。

黒川洞穴の調査では、各時期の縄文土器が出土しており、弥生土器など後の時代の遺物も少量出土することから、長期間にわたって洞穴が生活空間として利用されたことがわかる。また、石器などの道具類、貝輪や骨製の垂飾品、食料としての貝殻や動物の骨などが発見され、当時の食生活や精神世界を示す資料

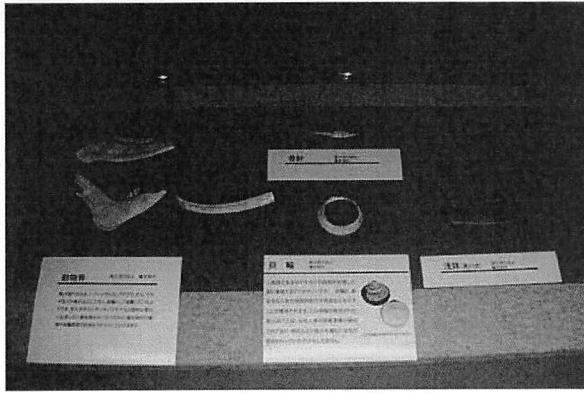


図16 黒川洞穴関係展示資料

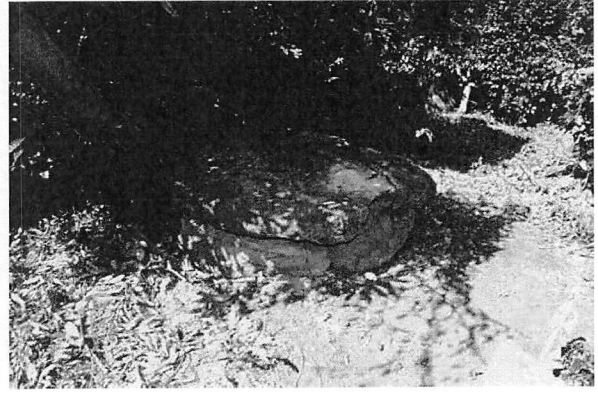


図17 入来遺跡の大石

を提供している。さらに、縄文晩期の遺物に伴うとされる女性の埋葬人骨も出土した。

なお、現在は落石の危険があり、内部は立ち入り禁止となっている。

吹上歴史民俗資料館所蔵の黒川洞穴出土資料数はそれほど多くはないが、本企画展では「黒川式」土器、獣骨、貝輪を借用し展示した（図16）。

入来遺跡

吹上町入来にある弥生時代から古墳時代にかけての遺跡で、伊作川下流域左岸の沖積平野に張り出した、標高約20mの台地上にある。吹上高等学校社会研究部の部員が、1967（昭和42）年に入来の土取工事現場で多くの土器を採集し、断面にも遺構を確認したことから遺跡の存在が注目されるようになった。その後河口貞徳氏らが4回にわたって発掘調査を実施した。

調査では、北西から南東にほぼ直線に伸びる溝状遺構が検出され、最大幅約1.5m、最大深さ1.15m、長さ47mにも及ぶ。溝の中からは多量の弥生土器や石器、木の実などの遺物が出土した。別地点では幅約3.0m、深さ1.25mにも及ぶ溝状遺構が見つかった。

溝の他には、住居跡や貯蔵穴も確認された。さらに、遺跡の近くには、径1.4～1.6m、厚さ20～30cmほどの2枚の大石を重ねたものがあり（図17）、これは古くから「支石墓」と呼ばれている。調査によると、大石は元の位置から動かされた可能性が高いが、近くの白寿遺跡や石塚遺跡でも同様の大石が見つかることから、この付近に大石を上置き、その下に遺体を埋葬する、支石墓が存在した可能性がある。大石近くから弥生時代の大甕の破片が出土しており、大石の下にあったと思われる遺体を埋葬する棺は、甕棺であったと推定できる。

鹿児島県の弥生時代中期の土器型式「入来式」土器の名称は、この遺跡から出土した土器に由来する。

本企画展では、「入来式」の甕と小型壺を展示した（図18）。

辻堂原遺跡

辻堂原遺跡は古墳時代を中心とする集落遺跡である。吹上高等学校社会研究部の部員が道路工事の際の断面に炭化米が詰まった貯蔵穴を発見し、「花熟里遺跡」として河口貞徳氏、上村俊雄氏らが調査を行ったことが、遺跡の周知のきっかけとなった。その後、近接する吹上中学校の敷地内で遺跡の存在が確認され、出口浩氏、池畑耕一氏らによって本格的な調査が行われた（1次調査）。また、2009（平成21）年には、吹上町教育委員会（現日置市教育委員会）によって発掘調査が実施された（2次調査）。

辻堂原遺跡からは、溝や住居跡などが検出された。古墳時代の溝は断面V字形、あるいはU字形をなし、集落を弧状に囲むように検出された。断面がU字状の溝は、幅2.8m、深さ1.0mにも及ぶが、途中で切れ



図18 入来遺跡関係展示資料

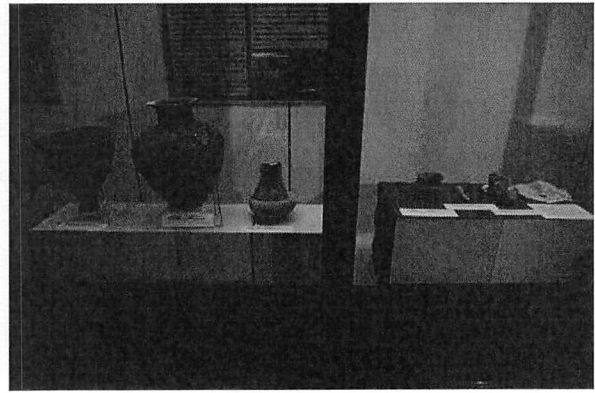


図19 辻堂原遺跡関係展示資料

るか、曲がっている溝もあることから、溝の掘削の目的は敵からの防御よりも集落の部分を区画する機能が想定されている。住居跡は計141軒検出され、方形と円形の形態があつて、面積は20㎡前後のものが多くを占めるが、45㎡を超える大型住居跡も見つかった。また貯蔵穴とみられる土坑も25ほどあつた。溝や住居跡からは、多量の土器が出土しており、3世紀後半から6世紀後半ごろの土器が主体となる。古墳時代の土器のうち、中期の土器型式に対して「辻堂原式」土器の名称が与えられ、現在でも広く用いられている。

辻堂原遺跡から出土した多量の遺物は日置市教育委員会が管理しており、一部は吹上歴史民俗資料館に収蔵・展示されている。

今回の企画展では、各種の土器や軽石製品を展示した(図19)。

4.3 本企画展示での資料館活性化の工夫

まず、資料館への来館者に、展示された資料と関連する史跡や遺跡を訪れてもらうことを意図した点である。今回の実践では行うことができなかったが、吹上町内の遺跡・史跡の訪問者に、実物資料が展示された鹿児島国際大学ミュージアムや吹上歴史民俗資料館を訪れてもらえるような案内を設けることで、双方向の人の流れを作り出すことができると考えている。

また、解説のパネルの説明は、できるだけ短く簡潔になるようにした。また、パネル中にも画像を用いて、よりわかりやすいものになるよう努めた。

さらに、企画展示の概要を簡潔にまとめたイメージビデオを制作し、企画展への導入として用いることに加え、これをインターネットで公開することによって、本企画展示の周知を図ろうとしている。併せて「吹上チャンネル」の番組中から、本企画展で取り上げた史跡や遺跡と関連するものを紹介してもらい、史跡・遺跡をより詳しく、また身近に感じてもらえるよう意図した。

5. おわりに

これまでの調査・研究に基づき、日置市吹上歴史民俗資料館活性化を意図して実践した特別企画展示について述べてきた。本企画展の開催時期の関係から、本稿に展示の評価を取り入れられなかったことが課題としてあげられる。今後展示に関するアンケート調査の実施および結果の分析を行い、報告するつもりである。

今回の実践では、史跡や遺跡での体験については取り入れることができなかった。史跡・遺跡で何らかの体験ができることは、それらの魅力を増すものと考えられる。例えば常楽院では妙音十二楽にちなみ、

訪問者が実際に用いられる楽器を用いて音楽を奏でることができるとか、天昌寺跡では天昌寺の肉筆画にちなみ、寺院内の写生コンテストを催すことなどが考えられる。

これからも引き続き日置市歴史民俗資料館の活性化への試みを続けたい。文化財の活用はもちろんのこと、観光という視点をさらに取り入れ、鹿児島県内有数の良質な泉質で知られる吹上温泉にちなみ、温泉をテーマにした企画展示や、1984年に廃線となった伊集院と枕崎を結んでいた鹿児島交通枕崎線の昔と今をテーマにした企画展示など、今回の企画展示と同様に、資料館と現地とを結びつけることを意図する形で実践したいと考えている。

謝辞

本研究は平成30・令和元年度鹿児島国際大学附置地域総合研究所共同研究プロジェクトの助成を受けて実施したものである。

特別企画展の開催にあたって、日置市教育委員会には資料の借用・提供など多くの協力をいただきました。鹿児島国際大学国際文化研究科博士前期課程の神前将太氏には特別企画展のイメージビデオ制作、パネルのデザインを行っていただきました。鹿児島国際大学ミュージアムの鐘ヶ江賢二氏には様々ご教示とご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

文献

1. 大西智和 (2019a) 「文化・自然遺産や文化財の活用による地域活性化の可能性」『地域総合研究』第46巻第2号, 61-66頁
2. 大西智和 (2019b) 「日置市吹上歴史民俗資料館に関するアンケート調査による資料館活性化の方向性の検討」『地域総合研究』第47巻第1号, 67-76頁
3. 鐘ヶ江賢二 (2018) 「文化財の調査研究における高校生のフィールドワークの可能性—特別企画展『吹上の考古学史をたどる』展示資料から—」『鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告』第15集, 1-7頁
4. 五代秀堯・橋口兼柄編 (1966) 『三国名勝図会』南日本出版文化協会
5. 常田和彦 (2018) 「吹上歴史民俗資料館の活用と課題について」『鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告』第15集, 15-17頁